

融合するアートと医療

20年、新生「山形ビエンナーレ」

2020年「山形ビエンナーレ」の
構想について語る中山ダイスケ学長
＝山形市・東北芸術工科大

東北芸術工科大（山形市）による2年に一度の芸術祭「山形ビエンナーレ」が、4回目の2020年は芸術監督に東京大医学部付属病院・循環器内科助教の稲葉俊郎さん（40）＝熊本市出身＝を迎え、新たな企画を打ち出していく。現役医師の知恵と芸術家のセンスを組み合わせ、「医療と芸術」を題材に心身の回復につながる多彩な催しを繰り広げる予定だ。

芸術監督に 医師・稲葉さん 心身回復図る企画多彩

芸術監督を務める医師の稲葉俊郎さん（東北芸術工科大提供）



山形新聞の取材に対し、芸術祭総合プロデューサーを務める中山ダイスケ学長が明らかにした。同大によると、稲葉さんはカテーテル治療など最新医療を専門とする一方、伝統医療や民間医療なども研究し、伝統芸能や民俗学、音楽、絵画にも造詣が深い。体が栄養を取ると同様に、心もエネルギーを取る必要があるとの考えで、「芸術はまさに心の食事」と提唱し、執筆や講演活動を行っている。

山形ビエンナーレは前回18年で山をテーマにした3部作が終了。新たな形を模索する中、18年11月に中山学長が香川県で開かれたトークイベントで稲葉さんと共演。「アートは新しい医療」との稲葉さんの考えを聞き、体に良い影響を及ぼすような「体験型のビエンナーレを一緒につくりたい」とオファーした。

中山学長は、来年の芸術祭について「見るだけでなく、触る、聞く、食べるなど来場者の五感にアプローチするような芸術祭にしたい」と構想を説明。「芸術」の枠を広げ、料理人や各種セラピストなど「アーティスト」として招く計画という。

「一枚の絵を見て感動するものも、一杯のスープを飲んで感動するのも、その行為が心に染み渡り、価値観を変えるという点では一緒だ」と強調。

「例えば音楽とマッサージを組み合わせるなど、稲葉さんと共にさまざまなプロフェッショナルによる企画を考えていきたい」と意欲を見せる。

会期は来年9月の計13日間を予定。「山のかたち、命のかたち」をテーマタイトルに、山形市内の複数の会場で展示、イベントを繰り広げる。

（近岡国史）

